

Devotion Time (静思の時の始め方)

1. 神様が語って下さるようにお祈りをして始めます。
2. その日の聖書箇所をゆっくり読みます
3. 神様が自分に何を語っておられるかを聴きます。
4. 祈り、語られたことを実践します。
5. 解説を参照します。

聖書日課

ルツ記

1 章

月

日

本書には、士師たちが活躍した同じ時代に起こった、もう一つの出来事が記されています。しかしその内容は、士師記のそれとは大きく違っており、本書は、暗黒時代における輝きとも言うべき、美しい物語です。主人公である女性の名が書名となっている本書ですが、聖書中、女性の名が書名になっているものは珍しく、本書の他には「エステル記」だけです。

ルツは、士師が活躍した時代に生きた人ですが、本書が記されたのはそれより後で、本書の最後はダビデが生まれたことで終わっていることから、執筆年代はダビデ王の治世中(BC1010~970 頃)と考えられています。しかし著者に関する記述が見出せないため、本書は誰が書いたのか、はっきりしていません。ただし、ユダヤ人の伝承によれば、サムエルということになっています(士師記も同様)。

イスラエル人の夫婦が、飢饉のために二人の息子を連れて、モアブに移り住みますが、そこで夫は死にます。その地で二人の息子は、それぞれ地元の女性と結婚。ところが約 10 年後、二人の息子も死んで、姑と嫁二人が残されました。姑は故郷の飢饉が終わったことを知り、帰郷を決意、二人の嫁に、自分の家に帰るようにすすめます。それは、二人の若い嫁の、今後の幸せを願ってのことでした。姑の 11~13 節の言葉は、申 25:5~6 に基づいています。一人の嫁は泣く泣く別れますが、もう一人の嫁は、姑と共に生きる覚悟を決め、悲しみの中で、新しい生活が始まりました。

嫁ルツは、モアブ人でした。それはイスラエルから言えば異邦人で、たぶんルツは結婚前は異教徒であったと思われます。ナオミ(楽しみ、快いの意)は、マラ(苦しみ、苦いの意)と自らを呼ぶほどの苦難を経験したのですが(20 節)、ルツはナオミの姿を通して、まことの神と出会うのでした(16 節)。もう一人の嫁オルパは去ったのですが、それも仕方なくということでした(14 節)。ナオミは、その生き様を通して、まことの神を証する存在だったのでしょう。

<心に残ったみことば、感じたこと、祈りなど、思いのまま書いてみましょう>

ナオミの故郷へやってきたルツは、落ち穂を拾って生活しようと、働きに出かけます(2 節)。それは、律法によって守られていた権利があったからでした(レビ 19:9~10)。ルツが落ち穂拾いに出かけた畑は、ナオミの夫の親戚で、有力者のボアズの畑でした。このボアズとの出会いが、彼女たちにとって、素晴らしい祝福へとつながるのですが、この出会いは、ルツの計画ではなく、ナオミの計画でもありませんでした。3 節に「はからずも(新共同訳「たまたま」)という言葉がありますが、これは原語では「偶然」という意味があります。英語訳(NKJ、TEV など)は「happened」という言葉が使われており、これを日本語に訳すと「偶然起こっちゃった」という感じでしょうか。人間的に見れば偶然であり、たまたまであるようなこの出会いも、神様によって確かに導かれていたものでした。神様は私たちが思ってもみなかった祝福を、あらゆる場面で用意しておられるお方です。

ボアズの親切によって、有り余る収穫(17 節。一エパ=22ℓ)を得て帰ってきたルツの様子を見たナオミは、背後の特別な人物の存在を思い、ルツに尋ね、ボアズの存在を知るのでした(18~20 節)。

ナオミの亡き夫エリメレクは、土地を所有していました。しかしナオミにはその土地を継ぐ者がおらず、また貧しくもあり、エリメレクの土地は他人の手に渡ろうとしていました。そのような土地に対しては、近い親類の一人が、それを買い戻す権利がありました(→レビ 25:25)。ボアズは、その土地を買い戻す権利を持つ、親類の一人だったのです。ナオミの 20 節の言葉は、そのような意味です。

<心に残ったみことば、感じたこと、祈りなど、思いのまま書いてみましょう>

姑ナオミは、嫁ルツの幸せを願い、ボアズへのプロポーズを教え、ルツはそれに従いました。ボアズはこれを真心をもって受け止め、対応するのです。ここにあるのは、互いに思いやりをもって、相手の幸せを願う人々の姿です。暗黒の士師の時代にも、このような者たちがいたのです。人と人との美しい結びつきは、神様を第一とするところから生まれます。神様を第一とした者が、人を思いやって生きる時に、正しい人間関係がそこに生まれるのです。

3:2 に「一緒に」という言葉が出てきますが、実はルツ記には、1 章にも 2 章にも、何度も「一緒に」という言葉が使われています。ルツは、モアブ人でした。モアブ人とは、アブラハムの甥であるロトの子孫であり、モアブとは、ロトとその娘が過ちを犯して生まれた子です。モアブ人は、主の会衆への出入りを禁止されていました(申 23:3)。ですから、モアブ人が神の民(イスラエル人)と一緒にいるということは、本来なら考えられないことだったのです。しかし神様は、呪われた存在であったとしても、その者が主と共に歩もうとするならば、その思いに応えてくださるお方です。

すべての人間は、神を無視して生きる罪によって、呪われるべき存在です。本来なら滅ぼされても当然の存在であるお互いですが、キリストの贖いの血潮によって、祝福へと変えられました。ここに神の愛が、あらわされています。

<心に残ったみことば、感じたこと、祈りなど、思いのまま書いてみましょう>

ボアズは、エリメレクの土地について、自らよりも優先権を持つ親戚と話し合う必要がありました(3:12~13)。本章の1~10節は、その話し合いに応じた親戚とのやり取りです。その親戚は、土地を買うつもりはあっても、ルツを妻とし、生まれる子にその土地を与え、ルツの前夫の名を残すなどということは考えていませんでした。彼は自分にメリットがないことがわかると、その土地の買戻しを辞退します。こうして正式な手順が踏まれ、めでたくルツとボアズは結ばれたのでした

門のところにいる人々と長老たちはこれを喜び、主がルツを、ラケルとレアのようになさるようと言います(11節)。ラケルとレアは、イスラエル12部族のはじめとなった女性です(創35:22~26)。また、12節のペレツとは、ユダと義娘タマルの過ちによって生まれた子です。しかし神様はその呪いを祝福へと変え、ペレツはボアズの先祖となりました。

悲しみのどん底を通ったナオミとルツでしたが、神様が結び合わせたボアズによって、素晴らしい祝福を受けることになりました。18~22節は、祝福の系図です。彼らの家系から、ダビデ王が生まれたのです。しかしこの祝福は、ダビデでは終わりません。この一族からやがて、イエス様がお生まれになるのです。その系図は、マタイ1章に記されています。その系図によると、ボアズの母はラハブと記されています。ラハブとは、ヨシュアの時代に、イスラエルの斥候を助けた遊女です(→ヨシュア2章、6章)。イエス様の家系には、カナン人(ラハブ)、そしてモアブ人(ルツ)が入っています。神様は彼女たちを、祝福の源とされました。

苦難と、複雑な人間関係の中で、神様を中心に据えることによってそれらすべてを祝福へと変えていったナオミ、ルツ、ボアズ……。複雑な人間関係の中で生きる私たちもまた、この三人の生き方の中に、祝福の秘訣を見出すことができるのではないかと思うのです。

<心に残ったみことば、感じたこと、祈りなど、思いのまま書いてみましょう>

